



ズワイガニ（北海道西部系群）

（資料3－1）

ズワイガニは我が国周辺では日本海、オホーツク海、および茨城県以北の太平洋沿岸に分布し、本系群はこのうち北海道西部日本海に分布する群である。本系群の漁獲量等は漁期年（7月～翌年6月）の数値を示す。

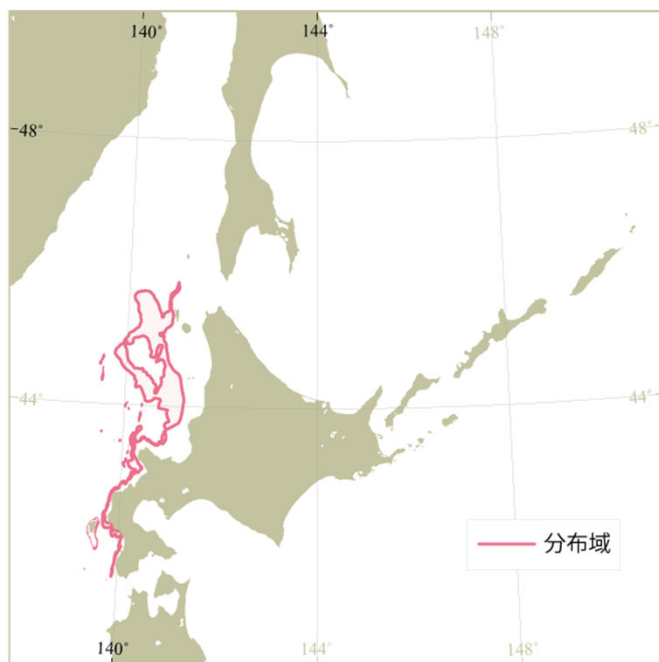


図1 分布域

本資源では積丹海山群、忍路海山、および武蔵堆斜面域に漁場が形成される。

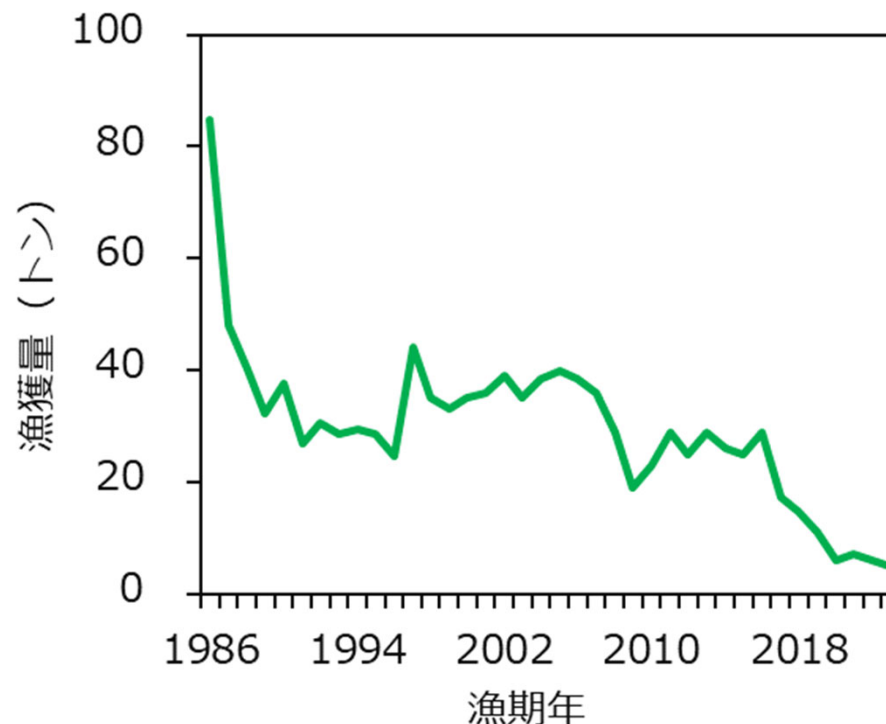


図2 漁獲量の推移

主にずわいがにかご漁業（かにかご漁業）で漁獲され、現在は3隻が、かにかご漁業の知事許可を得ている。

漁獲量は、1986年漁期は80トンを超えていたが、その後減少し、1988～2016年漁期以降は20～40トン程度で推移した。その後さらに減少し、2023年漁期は5トン（かにかご漁業：5トン、その他刺網等：0トン）であった。



ズワイガニ（北海道西部系群）

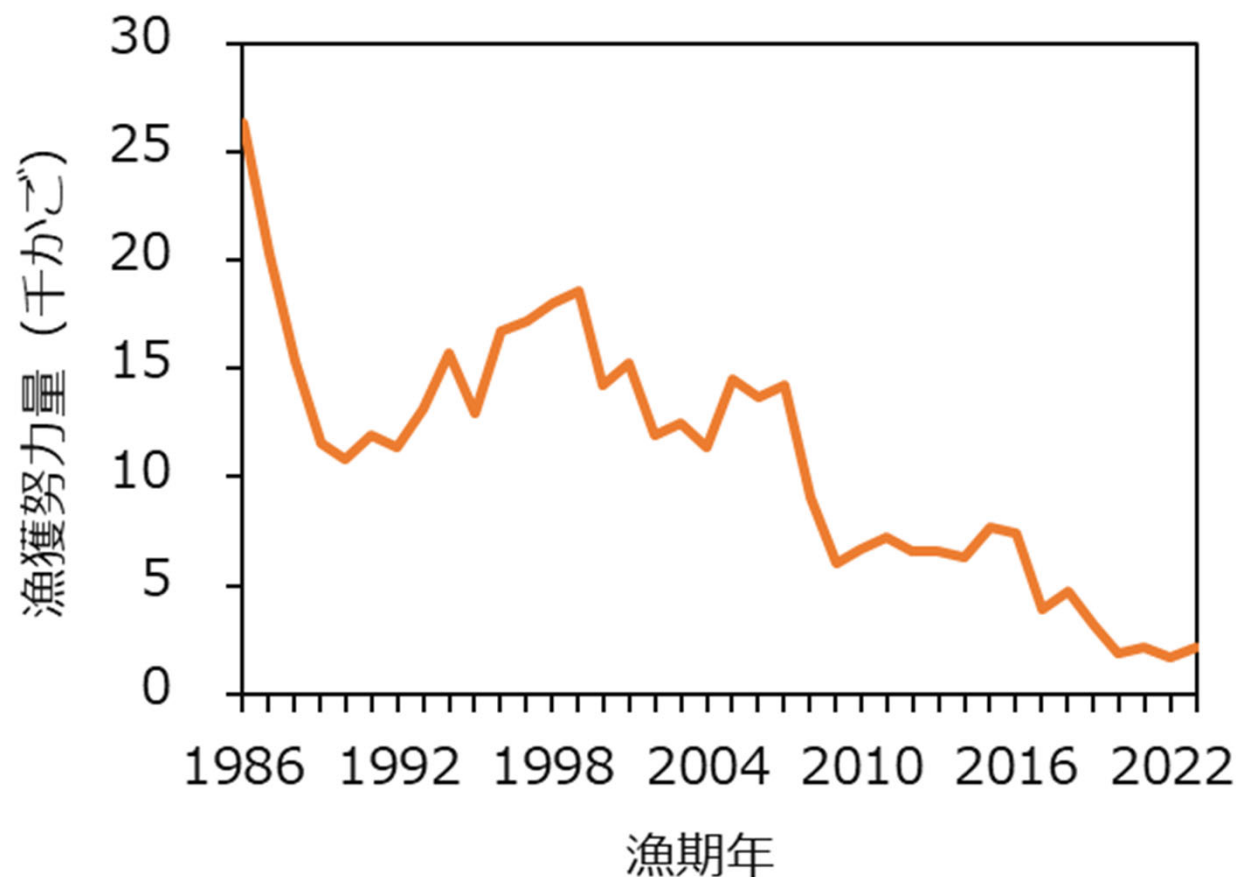


図4 漁獲努力量の推移

漁獲努力量は2000～2008年漁期には9千～15千かご程度で横ばいであったが、2009年漁期以降は6千～8千かごと少なく、2017～2023年漁期には荒天の影響もあり、2千～5千かごとさらに減少した。



資源評価の方法

2023年漁期（7月～翌年6月）までの漁獲データ
ずわいがにかご漁業の努力量と漁獲量



ずわいがにかご漁業の1かごあたり漁獲量
（標準化CPUE：資源量指標値）



資源管理基本方針で定められた「**資源量指標値1.0付近**
（我が国の漁船により得られる資源量指標値が、資源全体の動向を反映した指標値として取り扱うには十分な精度を有しておらず、目標管理基準値及び限界管理基準値の提案が困難）」を基準に現状評価



資源量指標値の推移

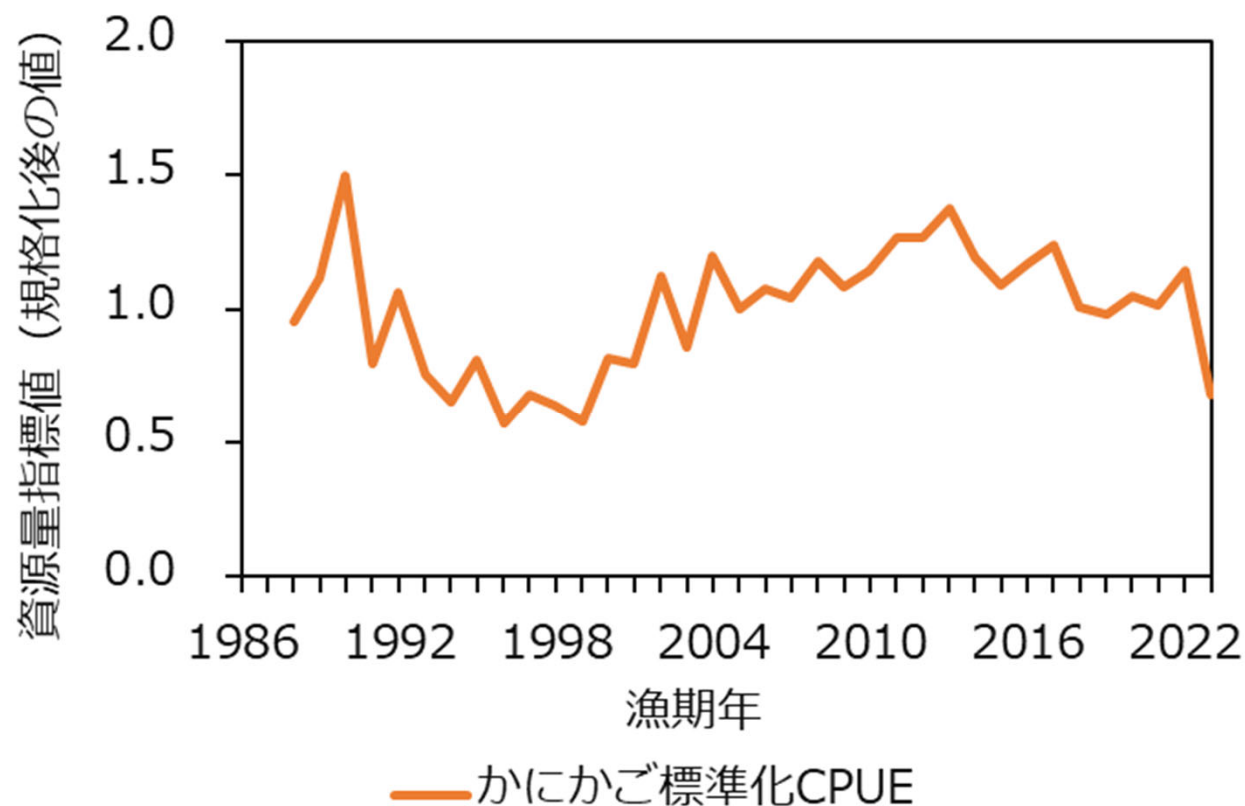


図3 資源量指標値の推移

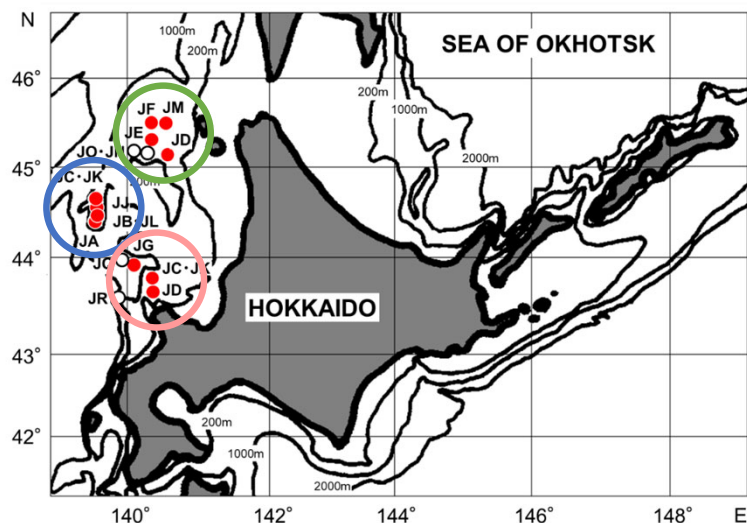
かにかご標準化CPUE（資源量指標値）は、1980年代末から1990年代後半にかけて低下した後は上昇して、現在は比較的高い水準を維持している。

2023年漁期は操業が不安定であったため、近年では低い値となった。

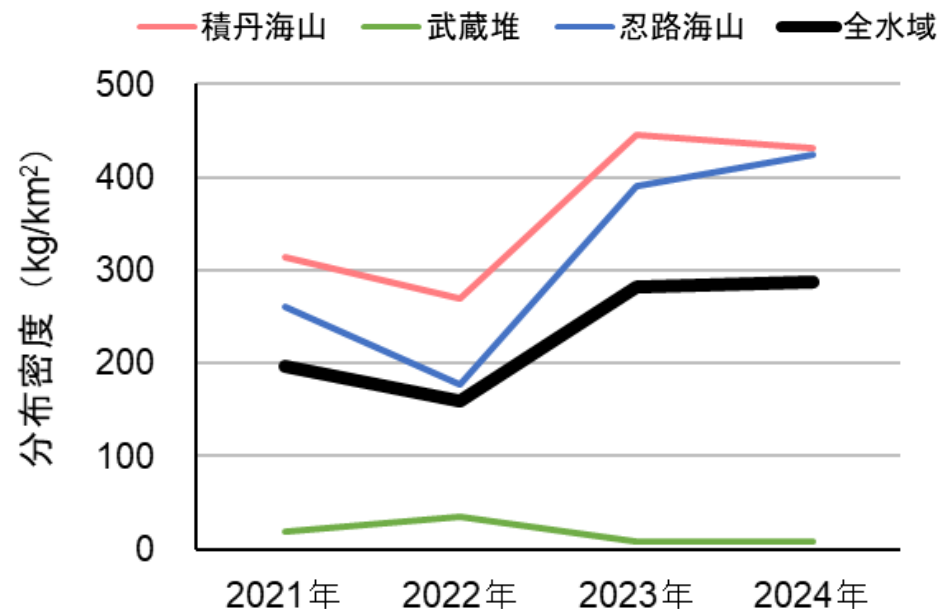


調査船調査（カニかご）の結果

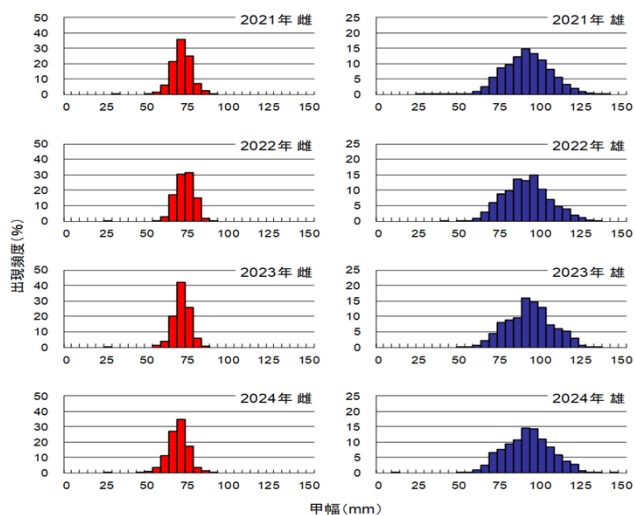
調査海域（●：調査点）



漁獲対象資源（甲幅100mm以上の雄）
の分布密度



甲幅組成



分布密度が高い海域においては、分布密度
は上昇傾向



調査船調査の結果からは資源は減少して
いないと考えられる



資源量指標値と目標水準

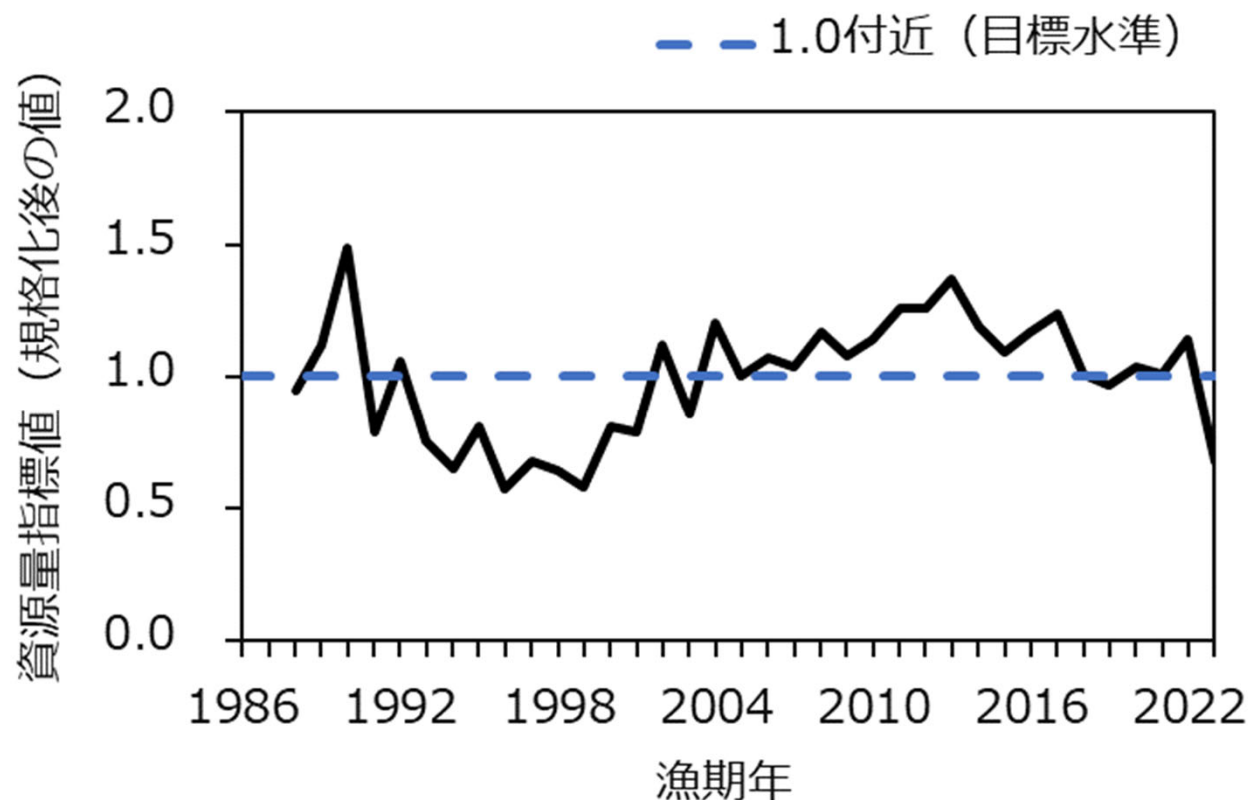


図5 資源量指標値と目標とされる水準

本資源の漁獲シナリオでは、1997年漁期以降の資源水準を維持するよう漁獲を管理することとされ、維持または回復させるべき目標は、資源量指標値が1988～2019年漁期の平均である1.0付近であることとされている。

2023年漁期の資源量指標値（0.68）は、当年漁期の操業が不安定であったため、この目標を下回った。ただし、中長期的に見て、近年は比較的高い資源水準が維持されていると考えられる。

本資源の漁獲シナリオについて

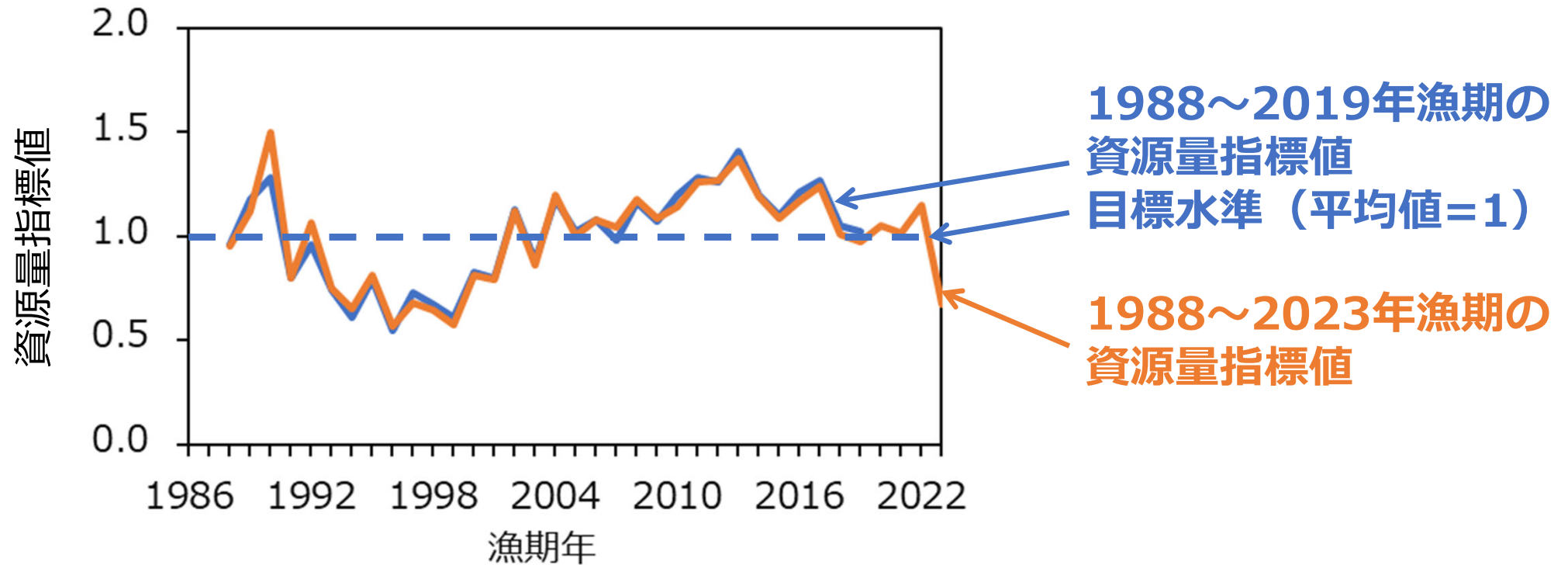
本資源の資源量指標値は、かにかご漁船の主対象であるベニズワイガニの漁獲状況や、ズワイガニの単価、かごの沈設日数など、CPUEに影響する要因を考慮できておらず、最大持続生産量に関する目標管理基準値や限界管理基準値を定めることは困難である。

本資源の漁獲シナリオでは、1997年漁期以降の資源水準を維持するよう漁獲を管理し、資源管理の目標の達成状況を踏まえ、必要に応じてこれを見直すこととされている。

前回のSH会合前後からの資源評価手法の変遷

年度	手法
2020年度 (前回SH会合)	標準化かにかごCPUEで、資源の推移・動向を判断。
2021年度	標準化かにかごCPUEに基づき、維持または回復させるべき目標に対する水準と動向を判断。
2022年度	変更なし
2023年度	変更なし
2024年度	補足資料にズワイガニ資源調査（5～6月）による分布密度推定値の経年変化の情報を追加 （直近の議論） 漁業では操業数が非常に少なくなっており漁場に偏りが生じている → 上記調査船調査の位置づけが高まる

前回のSH会合時点の目標水準のその後



- 資源量指標値は前回のSH会合以降、過去にさかのぼりわずかに変化している
- 今年度の資源評価において最新年のデータが加わり、更新される